

随筆・評論

野村 宗一
山口 育子 選
山口 一

特選

特別味のカレー

日夏町

田中 恵子

カチツとカギを掛けたとたん、アレツと

不安がよぎった。ガスを止めただろうか。

止めたはずだが、もう一度見てこようと、

ドアノブに手をかけたとたん、

「何ぐずぐずしてるんや、今日は遅いぞ」

車に乗りかけている夫の太い声が、背中

を叩いた。思わず手を引っ込める。大丈夫

だ、確かに止めた。指に感触が残っている。

助手席に走り乗った。出発。これから二

人でウォーキングに行くのだ。荒神山の裾

野を歩くようになって、三か月になる。日

が短くなるにつれて、出発時間が早くなっ

てきた。

今日は十一月最終日である。夫が畑から

戻ったのが四時をまわっていた。それまで

私はカレーを煮込んでいた。ウォーキングから帰ったらまず炊飯器のスイッチを入れて、カレーを再度煮込みながら大根サラダでも作ろう。ひじきの煮物もある。夕食は六時頃からになるだろう。片付けも簡単に済む。

今日は水曜日。八時からは楽しみにしている刑事ドラマがある。続いて九時からは歴史物の韓国ドラマが始まる。一週間の中で好きな連続ドラマが二つもある最良の夜なのだ。

けれど、もしガスが止まっていなかったとしたら、最悪の夜となる。

夫が帰ってきた気配を感じて止めた。元栓も閉めた。多分……。そうだ、あのガスコンロは消し忘れ防止装置が付いているはずだ。以前にそれが作動したことがあったではないか。あの時は家にいたはずなのに、何をしていたのだろうか。

不安が広がる。必ずその装置が働いてく

れるという保証はない。故障するということもありえる。鍋が黒こげになり、煙が吹き上がり、天井を貫き、近所が通報する。家の周りを消防車を取り囲み、放水。家中、水浸し。カレーはどうなる、テレビは見られない。

(止まって、ガス消し忘れたかも)

(アホ、何してるんや)

こんな会話を想像して、黙って唾を飲み込んだ。言えない、とても。

五分程走っていつもの草はらに駐車する。ただ今、四時二十五分。日の入りは五時頃だ。五千歩、四十五分を目安に歩いている。

一面、田んぼが広がっている。舗装道路が縦横に何本も交差していて、その日の気で好きな道を選んでいく。山際近くは梨の果樹園が大きい面積を占めていて、その中に幾本も道が整備されている。柿やりんご、みかんの木も栽培してある。

歩き出したとたん、突然カラスが一羽、田の中から飛び上がった。羽を休みなく動かし上昇し続ける。雲まで登るかと思う内に、見えなくなつた。西の方は夕焼けが始まりかけていた。

両手をしっかりと振る。両足に力を入れて踏み込む。静かすぎる。私と夫とカラスと白さぎ、そしてトビが動いている。他のも

のは全てどっしりと居座っている。

果樹園の周囲には、いつも十台近くの軽トラックが点在しているが、広すぎて作業している人の姿が分からない。伸び放題の雑草地の中に猪の踏み荒らした跡がいくつも見え、等間隔に鉄砲のような音が響く。猪への威嚇音だと、夫が教えてくれた。その音の後がいつそう静かになる。

夕日が完全に山に吸い込まれても、まだ明るい。三日月が見えた。カラスが飛び交う。私は上ばかり見ていて、道に落ちていた土の塊りにつまづいた。

「大丈夫か、気をつけいな」

「ありがとう、こけたら大変やなあ」
いつの間にか、二人とも高齢者になった。

車に書いて時計を見ると、五時十分。今日は五千五百歩を記録した。

助手席に座ったとたん、カレー鍋を思い出した。心臓が苛立ち始めた。早く家の無事な姿を見たい。

五時をまわると渋滞が始まる。五分のところを十分かかって我が家が見え出した。外見上は変化なし。内部はどうなっているか。外までカレーの匂いが充満しているのでは。

夫が車庫入れをいつもより丁寧にする。早く停めてくれと願いつつ平静を装う。外

へ出る。匂いはしない。カギを開け、ガスコンロに直行。よかった。ガスは止まっていた。元栓も締まっていた。今夜の夕食は無事だ。最良の水曜日の夜だ。

「今日のカレーは特別にうまいなあ」

「そうか、よく煮込んだからかなあ」

私は感謝を込めて、いつもの倍は鍋の中をかき回した。心臓を左手でなでまわしつつ、右手でカレーをなでまわした。

次からは途中で引き返して確かめよう。こんなことは心臓に良くない。そう思いつつ、特別味のカレーをお代わりした。

(評)

夕食前の日課となった夫婦ウォーキングの、ある日の出来事が綴られる。のどかな風景を楽しむ姿、それと対比して、ガス栓を閉め忘れたかとの不安が、よく描かれている。帰宅して、安堵に心臓を「なでまわし」、感謝してカレーを「なでまわし」て出来た、特別にうまいカレーを味わう場面で締め括る構成が良い。適所に配された夫婦の会話が効いている。



特選

ネツクレス

西今町

松本 トシ子

Uさんからの年賀状は、赤ちゃんを抱いた家族の写真だった。「子を授かりました。お会いしたいです」と添え書きがあった。

Uさんは、滋賀大学の二年生の時、ボランティアとして、はじめて我が家を訪れた。障害を持つ私の長男の、話し相手として来てもらったのである。

息子は、難病の筋ジストロフィー症で、全面介護を必要としていた。呼吸器の装着、痰の吸引などをしなければならなかったが、普通に会話をする事ができた。しかし最初、Uさんと息子は共通の話題に乏しく、話に花が咲くという状態ではなかった。それでも次第に、Uさんの素直で優しい人柄に魅かれ、月に一度の訪問を心待ちするようになった。

「これ、本当においしいです」

Uさんは、私の作った「菜の花のおひたし」を食べて目を輝かせた。家に閉じこもりがちな息子に見せようと、我が家への道すがらUさんが摘んできた菜の花を、ふと思いついてつぼみの部分を「おひたし」に

したのだ。親元を離れて学生生活している
Uさんは、そんな何気ない『おふくろの味』
に飢えていたのだろう。それをきつかけに、
街の料理教室では取り上げそうにない、地
味な家庭料理をUさんに教えることになっ
た。出汁のとり方、ほうれん草の茹で方、
大根の皮の剥き方……。息子と同じ二十歳
の若い女性に教えることは、それこそ山ほ
どであった。

「どんな材料も生命なのですね。だから、
料理は心をこめてしなければならぬので
すね」

Uさんは、茄子にかくし包丁を入れてい
る私の手を覗き込みながら言う。飲み込
みが早く、手先も器用だった。食事のとき
もきれいな箸さばきをする。この娘が息子
の嫁、だったらどんなにいいだろう。

二人で作った料理を、息子を囲んで食べ
た。食事をするたびに打ち解けて、距離が
縮まったような気がした。Uさんもいつそ
う頻繁に我が家を訪ねてくる。

息子は、養護学校に高等部から入学して、
パソコンを習い、コンピュータ・アート
を始めた。サポートする私も、五十歳近く
になっていたが一緒に学んだ。在学中、『日
本肢体不自由児・者の美術展』で、「オリベツ
テイ国際賞」を受賞し、卒業後はインタール
ネットを通じ、IT関連の作業所でコンピュー

ター・グラフィックス（CG）を描く仕事
をするまでになった。僅かな収入である。
しかし、在宅就労といえ、働き、その報酬
があるという事実は、私たち親子に夢を見
させたことに間違いない。そしてその夢に、
あたたかなやさしい輪郭を与えるようにU
さんがあらわれたのである。

ある日、「プレゼントを買いたい」と言う
ので、ジュエリー店に連れていった。あれ
これと品定めにしたつぶり時間をかけ、息子
が選んだのは、ネックチェーンに飾りの付
いたものだった。素朴な、しかし落ち着い
た上品なものだった。それでもまだ迷って
いる。「お金が足りない、予算オーバーや」
と悔しそうにつぶやく。値札を見るとそれ
ほど高額ではない。しかし、息子にすれば、
身の丈を越す金額なのかもしれなかった。

それを思うと車椅子を握っている私の手に
力が入った。こんなことで、はじめな気持
ちになってはいけない。今は何より、この
ネックレスが、息子の思うひとの美しい首
筋に飾られることの方が大事だ、それが息
子の夢であるなら。

「足りない分は出してあげる」と私は言っ
た。母親だって息子と同じ夢を見たいから
である。

そのプレゼントは、Uさんの誕生日のお
祝いに贈られた。実家の神戸に帰り、「養護

教員の資格をとる」と挨拶に来たときも、
彦根文化プラザで、息子がCGの個展を開
いたときにも、神戸からお祝いに駆けつけ
てくれたUさんの胸元に光っていた。

二十五歳の誕生日を迎えたころ、息子は
いちじるしく体調を崩し入院をした。

「Uさんにしらせようか」と尋ねると、う
れしそうに目を細くして「うん」と言った。

Uさんが来たとき、ほかの見舞い客と重
なり、ふたりはたぶん思うような話ができ
なかった。それが、ふたりの会えた最後の
日であったから、私はいささか不憫に思う
ので、年賀状に書かれた、Uさんの「会
たいです」という言葉を頼りとして、会
いにこうと思うのである。

（評）

難病の障害をもつ子と、その母親
である筆者、ボランティア女学生と
の三人の交流が、丁寧で平明な文章
で綴られる。息子に寄り添う母親は、
コンピュータ・アートを一緒に学
び、女学生の誕生日祝いに贈るネッ
クレスの予算オーバー分を補う。
「息子と同じ夢を見たい」母親の心
情が、随所から伝わってきて胸を打
つ。

蚕かいこさん大敷町
脇坂修身

朝起きて台所に行くと、いつもと何か違う。

「今日は蚕さんが家に来てくれやある日なんや」と母が云う。父は座敷の畳を上げている。板の間に石灰をまき新聞をしいている。そばには火鉢が二個、炭が赤々といこしてある。蚕さんを迎える準備をしていた。学校から帰って座敷を見ると、木ワクの中に真黒い毛ムクジャラが、うようよとひしめいている。これが蚕さんとの初対面だった。

戦後の食料不足に、農家は米作りに精出す、かたわら養蚕にも力を入れていた。

特に湖北の高時川、姉川、天の川は豊富な水と肥沃な土地が桑の木に適していた。桑がよく育つて良質の繭まゆが大量に生産されていた。

蚕を飼育するために蚕の餌となる桑の木を大量に育てなければならぬ。父母は早朝から高時川堤防ぞいの畑で桑もり（桑葉を採る）をして帰ってくる。晴天は仕事も楽だが雨降りは大変である。室内は暑から

ず寒からず、蚕は湿気に弱い、病気に気をつかう。

小さい間は一枚ずつ水分をふきとり、蚕に与えていた。蚕の成長は早い。数ミリの毛蚕けこが採りたてのやわらかい桑の葉を食べる。

食べる。食べる。食べまくる。

食べては長方形の青臭い糞をする。食べまくったあとは眠る。じいっと眠る。脱皮し新しい皮膚を整える時間あひだをひたすら眠る。眠り（眠ねむ）のあと、一米四方の竹編台に小分けし飼っていく。この蚕に二センチ角の網を上からかける。そこに桑葉を与える。

蚕は網目をくぐり上の葉を食べる。又々食べる。食べまくる。青黒い角長の糞をポロポロする。もりもり食べるから桑葉も大量にいる。食べかす、糞も多くなる。このあと「しりかえ」と云う仕事がある。母と学校帰りの私と向かい合う。蚕台の網の両角を持ち上げ、横の新台に置きかえる。古い台の食べ残し葉とポロポロ糞を横のてんご（藁編の入れもの）にほり込む。このしりかえをしていると、友達が「おーい、寺前で野球しよう」と呼びにくる。

「あかん、しりかえちゆう」と野球に行きたいのを断る。母のニヤツとする顔を見ながら、手伝っていた。当時プロレスとプロ野球の人気が出てきて、子供は夢中で布を

糸でまいて作ったボールと竹バットで草野球をしていた。

新台の蚕は、またまた食べる。新鮮な葉を食べては糞をする。食べたなら眠る。脱皮して眠る。長い長い眠に入る。静かに眠る。

「眠」の間、世話は一服できる。眠りが済む。またまた食べる。しりかえをして新桑を与える。体長もズンズン伸びる。食べて体長も5センチ位になる。大勢の蚕が一斉に食べる音も、ミシミシ、ポリポリの大合唱となる。静かな真夜中ではザー、ミシミシの音がつづいた。次の日も食べ続ける。

食べたあとは又々眠る。眠り、脱皮を繰り返す。五回の脱皮を繰り返す。その間約二十五日くらい。その後、もりもり食べて大きくなる。白い体に黒い斑点がでてくる。手に取って見ると、生あたたかいフニヤフニヤした体が妙にいとおいしい。青臭い少し胴長の生きもの、蚕。黒い毛ムクジャラの蚕が桑の葉をもりもり食べた。どんどん大きくなるにつれて、初めは臭いなどいやだった。馴れるにつれ、手伝いもおもしろい。時折、父から甘酸い紫色の桑の実を貰う。あれほど食欲のあつた蚕が、急に食べなくなる。体も少し黄身がかり、透けたようになり、蚕が成熟し糸を作れる状態になる。何匹かが熟蚕し始めると、その時を待ちかねたように、次々と糸を吐きはじめる。

この熟蚕を引き上げ、簇ますし（五センチ角の紙枠）の中に一匹ずつ入れていく。蚕は四角の枠に自から糸を吐き繭作りを始める。

蚕は体の中心から頭を8の字状に動かし、精巧な楕円体を作る。美しい糸を吐き続ける。休むことなく、ひたすら創り続ける。

蚕は白い一本の糸を魔法をかけるが如く絡めて、自己を繭にとじ込める。我家に縁あつて養育されて一ヶ月で立派な繭玉になる。

何千もの蚕が申し合せたように、順次、純白の楕円の玉、蚕さんの恩返し、繭玉は宝の山となる。父母が我が子を育てる如く、蚕さんを育てあげた。一個一個念入りに吟味され、大きな木綿袋に入れ、出荷される。リヤカーで山盛りの繭玉を押す父に、深々手を合わせて見送る母。仕事を終えし安堵と慈育した子を見送る母親がいた。

地方紙に草野川上流で蚕を育て、繭から座繰生糸を紡ぐ人の存在を知る。昔の父母と同じ想いの人達に会いたい。早速、浅井へ向う。長浜に入るや、三月のぼた雪で前方が見辛い。

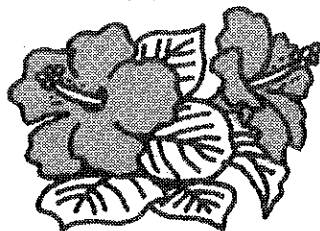
一先ず浅井歴史資料館で養蚕と座繰生糸の資料館を見学、今日でも伝統産業を守り続ける人々に感銘する。ぼた雪は降り続く、館の人が「今日は止めとかあるほうが…」

「もうじき春や出直します」一目散に帰った。

入選

（評）

戦後、湖北地方で養蚕を手伝った少年時代の体験を、丹念に描いていて貴重な記録である。蚕の成長過程での描写では、桑の葉を食べる様子や音など臨場感がある。蚕の世話をする父母の様子や、繭玉の出荷に手を合わせて見送る母の姿などを回想し、今日でも伝統産業を守り続けている人々に、筆者は思いを馳せる。



はじめてのひとり旅

大藪町

外村輝夫

幼い頃の体験には、好奇心や遊びの延長から生まれるものや、親の意向で子どもの自立をうながす体験などがある。

私は昭和五十九年末、名古屋に初めて単身赴任した。翌年、当時中学一年生の娘、小学四年生の息子が夏休み中の一週間を利用して、妻の運転で名古屋にやってきた。

翌朝、息子が宿題をしようとする、家に教材を忘れてきたことに気がついた。

「あれだけいうたのに、忘れてきて……。この一週間どうする気なんや。取りに帰るか」

よもや取りに帰らないだろう、と思いがら妻が怒っている。

「ぼく、これから家まで取りに帰ってくる」まさかのことばに、みんなが驚く。

「遠くの友だちの家には、自転車でも行くけど、買い物などは、いっつも車で送ってというのに、ひとりで彦根までいけるんか」
「うん名古屋は初めてやけど、大丈夫やろう」

息子は全く気にしていない。これまでJ

Rの電車や地下鉄はもちろん、彦根市内の路線バスでさえ、ひとりで利用したことがない。

都会の児童が、電車やバスで私学に通学する様を見かけるが、育ってきた環境が違う。

息子なりに、忘れた自分が悪い。不安でも取りに帰らなければ、この一週間がだめになる、と自分に言い聞かせて、決心しようだ。

私は、娘を同行させようかどうか迷った。しかし息子の表情に、くもりがなかったので、ひとりでやらせることに決めた。

宿舎は瑞穂区運動場の近く、地下鉄鶴舞線の「八事」駅まで歩いて十五分。地下鉄を乗りついで名古屋駅に出るまで、順調でも一時間余りかかる。当時、名古屋駅と栄方面を結ぶ東山線の混雑を避けるため、現在の「桜通線」が新設工事中で、乗り換えホームが複雑だった。時刻表を丹念に調べて、経路にそった注意点を朱で書く。携帯電話がない頃で、公衆電話の利用に備えて十円玉を多めに持たせた。わからないことがあれば、ひとりで迷わず駅員さんや店員さんなど、制服を着た人に問うよう、付け加えることも忘れなかった。

「行ってらっしゃい。十分気をつけてな」
出がけに何気なく口にする「行ってらっ

しゃい」の言葉には、無事に戻ってきてほしい、という願いが込められている。息子に未知の体験をさせて、自信と自立をうながそうと送り出したものの……。やはり娘を同行させるべきではなかったか、などと考えると不安な気持ちでいっぱいだった。

宿舎前の通りを、東に三百メートルすむと道路は右に折れる。無事に戻ってくることを願いながら、息子の後ろ姿が見えなくなるまで見続けた。息子が一度も振り返らなかつたことで、心のもやもやに踏ん切りがついた。

三時間近くが過ぎた。妻も娘も多くを語らない。沈黙を破るように電話がなつた。妻と娘がかけよる。息子は、「無事、いま家に着いたよ、とくに変わったことはなかつたから」

と、いきいきとした声。安堵した心が表われていた。とりあえずほっとしたが、まだ戻ってくるまでの不安が残る。

時の経過につれて不安が増してゆく。先の電話から、ほぼ二時間半が過ぎていた。通りまで出て、遠く息子の姿を求めたが……。心を落ち着かせようと、部屋にもどつて冷たいお茶を口にする。名古屋の夏は、ことのほか暑い。自動販売機で水分補給するよう、言い忘れたことを悔やんでいると、「ただいまあ……。冷たいお茶ちょうだい」

何事もなかつたような息子の声。

「お帰り、良かった。ほんとうに良かった」心から良かったと胸をなで下ろす。せいっぱいのことばで迎えると、強く抱きしめた。

息子は照れて体をのけぞらせたが、一回り大きくなったように感じた。そばにいた娘の目が潤んでいる。妻がいった。

「今夜はあなたの好きな焼き肉にしような」翌朝、やぐらこたつを学習机にして、息子が教科書に向かつている。今まで見せたことがない後姿だった。

親は子育て中、失敗を繰り返すこともある。「はじめてのひとり旅」は、息子みずから言い出したことではないが、子どもは心身ともに弱いもの。大人は、自分が歩んできた道だから、守ってやらなければならぬ。

本人を信じて子どもの行いを、尊重することの大切さを学んだ。

いまは携帯電話やスマートフォンで、常に連絡を取り合い、安全、安心が確かめられる便利な世の中になった。反面、スマホディアを賑わす、子どもに関わる事件や事故が、あとを絶たない。もしもあの時、何か起きれば、なぜ一人でやらせたのか、悔いが拭いきれずに、生涯責めを負うことにもなり兼ねない。

地震や事故など、予期しないことが起こらなかったことも幸いだった。いま思い出しても冷や汗が出る。あれ以来、息子は忘れものがないか、気をつけるようになった。

(評) 当時小学四年生だった息子が、夏休みに筆者の単身赴任地に来て、忘れた宿題を彦根へ取りに帰るひとり旅を回想する。携帯電話やスマートフォン、子どもに関わる事件や事故など、世相にも言及する。ひとりで往復する息子を心配しながら待ち、その無事に安堵する父親の心情がストリートに伝わってくる。

入選

てんとう虫

芹川一丁目
楠 亀 美恵子

クリスマスが近づくと、主人が亡くなった日のことを思い出す。仏壇の前には、孫娘二人の手紙が並べて置いてある。

「おじいちゃんサンタへ『クリスマスプレゼントに百人一首を下さい。勉強で使うから、おねがいします』くるみ」

「おじいちゃんサンタへ『おりにこうにしていただきますので、クリスマスプレゼント、パス

ルをください』さくら」

あの日から七年になる。十二月二十四日。クリスマスイブの日であった。下の孫が生まれて五か月の時で、孫の成長と共に、月日も同じように流れていく。

上の孫が五歳になった頃だろうか。クリスマスプレゼントは、お爺ちゃんが、サンタクロースになって、プレゼントを届けてくれているのだと信じ始めたのだった。

私が、毎日仏壇と、お爺ちゃんの遺影に向かって話している姿を見ていて、ある日、二人が聞いてきたのだった。

「お婆ちゃん、お爺ちゃんは今何処にいはるの」

答えに詰まっていると、電気のはしりの所に、一匹のてんとう虫が動いていた。

「ほら、見てごらん、来てくれているよ、てんとう虫さんが」

孫娘二人は、

「ワア、ほんまや、お爺ちゃんがきている。聴こえたんかな？」と手をたたいて喜んでいた。

主人が亡くなった後、度々現れてくれる「てんとう虫」を、お爺ちゃんだと、我が家では思いこんでいるのだった。今もタイミングよく現れてくれる「てんとう虫」に、改めて確信するのだった。

また、瀬戸内寂聴さんの本にも

「亡くなった人は、姿は見えなくても、愛した人の左肩に必ずおられます。」

と、書いてあったのを思い出した。

私も、この言葉を信じる一人として、また、家族の夢のなかにも出てくれる主人は、皆の側にいつもいてくれる。時々、娘が夢の話をしてくれるが、

「お父さんと芹川の堤防沿いを、手を繋いで散歩していて、事故のあった時の事を聞くと『右から出て来るトラックに気を取られていて、気づいた時には、前に止まっていた車にまともなぶつかってしまつて・・・』と言つて、いきなり私の手を力強く握りしめてきやはつたわ」

この話を聞いた時は、主人の後悔の気持ちが伝わってくる様で、涙が止まらなかつた事が私の記憶に強く残っている。私の夢には、何時もニッコリ笑っている。障害のある私の身体を、心配してくれているからなのだろうと感じている。孫娘の夢に、

「おじいちゃんがお仏壇から出て来て、このイスに座つてお酒飲んで笑つてやつたよ。」

お仏壇の前に、クリスマスプレゼントのお願い手紙が始まつたのも、度々現れてくれる「てんとう虫」を、お爺ちゃんだと、皆で思い始めた頃からだった。小さなてんとう虫だが、赤と黒の斑点は白壁の部屋には、鮮やかな色彩で目に映る。同時に主人

が黒地に赤のポイント柄の帽子を被っていた姿が、私の脳裏には、てんとう虫と重なって蘇ってくる。

娘と孫娘二人の、

「た、だいま」

と、元気な声が響く。三人を笑顔で迎えた。すると、三人が揃って、お仏壇の前に座ったのだ。孫娘二人が、木魚や、鐘を出している。娘はお経の本をだして、申し合わせたように始まり出した。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

「ボクボク、カンカン」

驚いている私を尻目に、延々と続けている。今日は、十二月二十四日だ。主人の七回目の命日。揃って御経をあげる姿を見るのは初めてであつたから。

御経が終わると、孫娘二人が寄ってきて、「お婆ちゃん、明日のクリスマス、お爺ちゃん、覚えてくれているかな？」

「心配ないよ。ほら、また『お爺ちゃんてんとう虫』が来て二人を見ているよ。」

孫たちが眠りに付いたのを見届けて、私は、密かに買って隠して置いた、二人のプレゼントを出してきて、手紙を添えた。

「お爺ちゃんサンタだよ！」

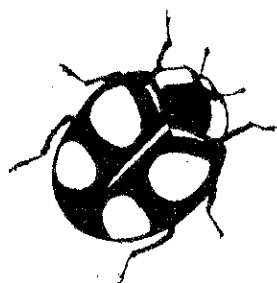
御経もあげてくれて、ありがとう。お爺ちゃん

んはいつも皆の側にいるからね」
手紙とプレゼントを仏壇の前に並べ、主人に

「明日の朝の二人の笑顔が楽しみやね。」
と、語りかけ、手を合わせた。

(評)

七年前、夫が交通事故で亡くなつてから、度々タイムミングよく現れる「てんとう虫」を見て、筆者は、黒地に赤のポイント柄の帽子を被っていた夫の姿を回想する。孫娘に、おじいちゃんは「てんとう虫」になつて傍らに居るよ、と話す。筆者・娘・孫それぞれの夢に出てくる故人を偲び、娘と孫が、命日のクリスマスイブにお経を唱える情景は、ほのぼのと暖かい心持ちにさせる。



入選

ローレライ

後三条町

三宅 春代

ヴォーリスの設計、建築による豊郷小学校の旧校舎で、毎月第三土曜日の午後、歌声喫茶が行われている。運営は、さまざまの職業をもつ歌う事大好きな人達が集り、楽器伴奏やアルト、テノール、ソプラノ等の持味を發揮して、皆の歌唱をリードしてくれる。司会の女性もユニークなトークで会を進行、盛りあげてくれる楽しい所だ。

かねてから歌う事は下手ながら、歌の大好きな私はチラシで知った創立当初から、出かけていって声を張りあげてくる。いろいろなジャンルの曲が、会場のなかからリクエストされ、歌にまつわる思い出やエピソードも披露され、よりムードがたかまる。

十月の例会には、「ローレライ」の曲が、懐かしい歌としてリクエストされ、皆で歌った。この歌を口にし、耳にする度に、私には鮮やかに思いうかんでくる情景がある。

時代は半世紀プラス二十年以上も前のことだ。舞台は、かつて学んだ札幌の女学校の体育館。まだ、根雪の残っている四月の頃、だつたらうか。体育の授業はその年、東

京の女子体育大を出られたばかりの前田先生の始めての授業となっていた。

当時の北海道は、本州、いわゆる津軽海峡から西を「内地」と呼んでいて、内地の大学、特に東京の学校を出られた先生には、畏敬の念さえ抱いていたものであった。

体育館で憧れと期待をもって整列している私達の前へ現われた先生は、体育大の制服、幅の広い襷のあるジャンパースカート姿で現われた。最初に「一寸、観て下さいね」と、ローレライの曲のレコードをかけ、踊り出されたのだ。広い体育館一ぱいに使つて、トーシューズの爪先を軽くたて、大きな動作で伸びやかに踊られる。

特に二番目の歌詞、

美し少女の巖頭に立ちて

黄金の櫛とり髪のみだれを

梳きつつ口吟む歌の声を

神怪しき魔力に魂もまよう

のところでは、歌詞そのままの表現、片手を後髪に当て、両手を交互にたおやかに、少女の表情ゆたかに踊られたのだ。

我等生徒一同、思いがけない先生の目の前のダンスに呆然と見とれていた。踊り終わった先生に拍手も忘れ、ポーズとしている私達に、先生は笑顔に笑窪を見せて挨拶されたが、その内容は残念ながら覚えていない。一同、感激、感動。それから私達生徒一同

は、前田先生にのぼせあがったものだった。

先生は、おでこが広く、顔の輪郭は逆三角形形で、口許が小さく何よりの特徴は、笑うと笑窪が目立つたことだった。眼はクリクリとしていて浅黒い肌、南方の美人を偲ばせる顔立ちだった。何よりの先生のイメージを代表するのは、笑窪に象徴される笑顔であった。

「愛くるしい」という表現が、ぴったりの私達の体育の先生であった。

体育が苦手だった私も、前田先生の授業となると、いそいそと、当時の体育の授業の服装であった、黒い木綿の襷のあるブルマーに穿きかえたものであった。

友人の誰、かれが、ファンレターを出した、と聞かされたが、私は好きだったけれども、ファンレターを書いた思い出は残っていない。

「アレツ、手紙と札状の葉書、書いたのどこへ置いたつけ。」やっとな書いた返信用封書と、草花の絵の印刷された絵葉書の束が見当たらない。行動範囲を思い出し、食卓や戸棚の台、下駄箱の上など、何回も見て廻るが無い。

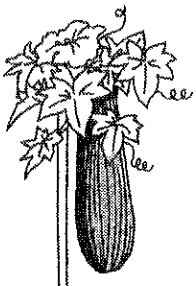
諦めて買物に出ようとすると、買物袋の中に入っているではないか。買物のついでに投函しようとした行為をすっかり忘れて

いるのだ。乏しい「老い」のエネルギーと、残り少ない「刻」が勿体ない。

前日の夜迄は意気こんでいた会合を、翌朝になつてすっかり忘れ、電話で呼び出され、慌てて駆けつける始末。昨日の事が思い出されず日記が書けない。最近、物忘れがひどく、事毎に「老」の悲哀を感じているのに、七十余年前のつよい印象は、鮮やかに遺っている。

豊郷会場で、歌いまくって少々疲れたが、帰宅後久し振りにピアノにむかった。蓋のほこりを払い、ピアノ伴奏曲集の楽譜を取り出し、「ローレライ」の曲を弾いた。この曲は思い出のある曲なので、日頃からつれづれに弾いていた曲だ。スムーズに指が動く。そして、その日ばかりは、一番から三番迄を、小声で歌詞にそつて歌った。調子にのつて二回めは少々声を大きくして歌った。

「今日は、私の『ローレライデー』やわ」と呟きながら、かつての青春時代を懐しく偲んだ。



(評) 豊郷小学校旧校舎の歌声喫茶で「ローレライ」を歌ったことから、女学校時代の体育授業で、新任の先生が素晴らしい踊りを披露された記憶が鮮やかに蘇る。筆者は、最近の物忘れに「老」の悲哀を感じるが、久しぶりにピアノを弾き、特別な思い出を持つ「ローレライ」を心ゆくまで歌い懐かしむ。前向きに生きる暮らしぶりを描き、共感を覚える。

入選

星が守っていてくれた

犬上郡甲良町

上野 初子

ブルツと震えながらも外へ出る。見上げれば満点の星。冷たいくらいにピカピカと輝く。

そんな光景に出会うたび、ふと思い出すのは三十年以上も前のこと。

我が子は二人とも極寒の季節に生まれた。だから過酷な冬場の子育ては私の中にしっかりと刻まれていて、今も新鮮に脳裏をよぎる。

当時フルタイムの仕事を持っていた私は、いつもいつも家事やら育児やらで駆けずり回っていたような感じだった。義父母とは

同居していたから随分助けてもらってはいたが、その分、嫁の立場として私自身が甲斐性なりに気を遣っていたことは確かである。

寒空を背に帰路に着く。そして悴んだ手で我家の戸をソロツと開ける。「お義母さん、遅くなつてすみません」と言いながら。

そんな時、私の視線は斜め前四十五度にあつた。土間には子どものズック靴や大人のサンダルなどが雑然としている。だから、帰宅後の一番の家事は「靴並べ」と決めていた。

もちろん、家族に「ああ疲れた」とか「寒かったわ」などと愚痴を零すところではない。

一応、私が家を空けている間の息子達の世話は義父母がしてくれていた、とはいうものの、昼間に溜った洗濯物は、当然私が夜のうちに片づけてしまわなければならぬ。

毎日夜更けに洗濯機を回す。なんとか脱水ができたら今度は干す作業。籠に山盛りの洗濯物を抱えて震えながらも外に出る。そして軒下に並べ干す。まずは「おしめ」から。布製のそれをスラツと竿に通しながら、しばしば夜空を眺めては明日の天気を窺った。

星はキラキラ輝いているけれど手の指が

千切れる程に冷たいと、「もしかしたら明日は雪かな」と思いながら。しかも、そんな拙い素人の予想が意外にも当たっていたのだ。

その頃は、「おしめ」が要らなくなったならどんなに楽になるだろうと考え、子どもが早く大きくなることを願ったものだ。

やがて、いつの間にか「おしめ」は要らなくなっていた。しかしながら、それでグーンと洗濯が楽になった、という訳でもない。子どもが大きくなるにつれ、体操服や下着など嵩高い物が増える。それは我が子が普通に成長している証であり、むしろ喜ばしいことだったのかも知れないが。

だからやっぱり、夜間のうちに空を見上げながら洗濯物を干すことが常であった。

尤も、もうその頃は我家にも洗濯乾燥機があつたから、わざわざ寒いのに外に出る必要もなかったのだが、そこは義父母の手前、気を遣つてのこと。「電気代が勿体ない」と言われることが目に見えていたから。

そんな調子で何年かが過ぎ子育ても少しばかり楽になった頃、義父母は天国へ召され私の前から去つていかれた。続いて息子達も、それぞれの道を歩むべく家を出て行った。

今この家に残されているのは私たち老夫婦。故に誰にも気兼ねなく家事ができるよ

うになつた。洗濯だつて私の裁量で自由にできる。

最近、洗濯機を買い替えた。新しいものは、正に時代遅れの私の「洗濯の概念」を変えた。

夜にスイッチを押しておく、朝には乾燥されたものが取り出せる。「なんて便利！」と流石に初日は感動した。

しかしながら何日間かそれを続けると、便利であることが当たり前になつてしまつて、本当の有難さを忘れてしまう。その上、朝に乾いた洗濯物を取り出して畳む、という作業さえ面倒に感じられるようになってくる。

人間の「慣れ」とは怖いもの。贅沢なことをしていると今に天罰がくだる、と思ひながら洗濯物を畳む日々。

そんな時、ふと右手の指の皸に気が付いた。もう何十年間も、この手で水仕事をさせてもらつてきたなあ、赤ん坊の「おしめ洗い」は辛かつたなあ、。節くれだつた私の右手は、遠い日の不甲斐ない自分を物語っているよう。

「人生に無駄なことは何一つない」という言葉を聞いたことがある。私の場合、全くその通りだと納得してしまふ。

もし私が、結婚した当初から嫁ぎ先で自由に過ごせて、思うままに子育てができて

いたならば、今の「細やかな幸せ」は手に入れることができていなかっただろう。

凍えそうな晩に、悴んだ手の指に息を吹きかけながら「おしめ」を干した日々。そんな心細い経験をさせてもらえたおかげで、スイッチ一つで乾燥までやつておいてくれる賢い洗濯機が、勿体ない位に有難く感じられるのだろう。

日がとつぷり暮れた頃、ソロツと戸口に立つ。星が降るように輝く空を見上げると、あの頃が鮮やかに蘇る。あれは私の貴重な体験。寒くて情けなくて挫けそうになりながらも、「おしめ」を干すことができたのは、輝く星達が見守つていてくれたから。

(評) 老夫婦となつた現在と対比して、若い頃に義父母と同居して仕事と育児を両立させた苦勞を回想する。洗濯乾燥機など家事の機械化が進むなか、筆者は、かつて冬の星空のもと「おしめ」を洗い干し、長年水仕事をしてきた手を愛おしむ。若い頃の不自由で心細い経験が、「細やかな幸せ」を感じるのに貴重な体験だった、と今の心情が素直に綴られている。

佳作

舞い姿

開出今町
掛田洋子

佳作

千々の松原の春秋

大藪町
吉田和治

佳作

許六・梵天に供す

甘呂町
小野和子

佳作

二人の社会デビュー

高宮町
細田綾子

《総評》

応募作品二十編に、それぞれの人生を垣間見せていただいた。自分自身の生き方、家族との関わり、地域社会との関わり、世相を反映した課題、などが綴られていた。

身近な事象から掬いあげられた、人間の真実に触れる、普遍性ある作品に共感を覚えた。

応募作品の中には、個人的回想や記録に留まるものが見うけられ、惜しまれた。普遍性ある「作品」となるには、そこに人々との交流が描かれているか、社会との繋がりがあるか、その上で現在の自分が描かれているか、が要になると思われる。

各自が歩んできた人生の回顧を踏まえて、現時点での自分の考えや生き方を書くことに繋いで欲しい。

私達は、「書く」営みを通して、自分を見つめ、人生を深めている。そこに喜びを見出すから「書く」のだと思われる。この原点を大切にしたい。

そして書き終えた後、推敲を重ねることによって、さらに自分の思いが収斂されていく。

こうして作品に込めたメッセージを発信し、読者とテーマを分かち合う。そういう

場として「彦根市民文芸」を位置づけ、ともに励んでいきたい。

山口 育子

佳作

枯山水の庭

後三条町
江畑民子

